

巻 頭 言

COVID-19 パンデミックで感じていること

加 藤 純 一

本稿を書いている今（2020年4月27日）、COVID-19は全世界で猛威を振るっております。政府および広島県の非常事態宣言を受け、私が勤務する広島大学も、4月22日から教育・研究活動を大幅に制限しております。それに伴い、大学の活動はオンライン遠隔授業、オンライン会議、リモートワークへの移行が余儀されなくなっております。リモートワークに必要なシステムはすでに確立されたものであり、いかにこれまでこうした技術の活用をさぼってきたかを痛感しております。大変な時期ですが、新たなオプションを身に着ける絶好の機会ととらえ、日々奮闘しております。おそらく、コロナウイルスの終息（収束）後、リモートワークが取り入れられる機会は大幅に増えるのであろうと思います。しかし、オンラインの授業や会議を何回か経験するにつれ、「それらが本当に対面の講義や会議に置き換わるのか？」という疑問が生じてきました。オンラインの通信であると、しぐさやその場の雰囲気などが伝わらず、それでコミュニケーションの効率が落ちているように感じます。いかに言語以外の情報が相互理解に寄与しているかを実感した次第です。

私は所属していた先端物質科学研究科（現在、統合生命科学研究科と先進理工系科学研究科に改組）は、量子物理科学専攻、分子生命機能科学専攻（バイオ）、半導体集積科学専攻から構成されており、理工融合、物理（物性物理と半導体）とバイオの融合を目標に掲げたユニークな研究科でした。設立当初はお互いの考え（感じ方）の大きな違いに戸惑いしかありませんでしたが、20年の研究科活動の中から、スマートバイオセンシング（<http://sbcs.hiroshima-u.ac.jp/>）やバイオナノマテリアル（<http://biogenicnano.hiroshima-u.ac.jp/>）などの融合研究拠点が形成されております。「異分野融合とよく言われるが、なかなかうまくいかない。先端物質科学研究科でそれがうまく進んだのは何故か？」と聞かれる機会が何回かあります。その問いに対しては「同じ建物の中で研究科生活を送っていることが重要」とお答えしております。実はこれ、欧米でも実践されていることなのです。スタンフォード大学のBioXやイギリスのフランシス・クリック研究所がそれです。ちょっと自慢なのは、先端研の設立はBioXやクリック研究所に先んじていることです。もうひとつ、「様々な業務委員会があるのが異分野融合に役立った」と半分冗談、半分本気でお答えしています。やはり、バーチャルではなく、現実世界で顔を合わせ、人を知ることが融合研究の成立に重要であると考えます。

学会はどうでしょうか？学会の重要な役割である研究成果の発信では、例えば報文の公表はすでにオンラインで行ってますし、講演もオンデマンドで公開することができますでしょう。しかしバーチャルのみでは立ち行かないと考えます。人となりを知ることが交流を深めることに必須でしょう。先ほど述べたように、言語以外の情報もコミュニケーションに大きく寄与していることから、現実世界の対面での交流の機会を設けることは、学会にとって重要な役割であると考えます。特に環境バイオテクノロジー学会には、様々な分野・領域の方が参加しており、そのコラボレーションにより目標の具現化を目指しております。したがって、今後、バーチャルな活動を取り入れていくこともあろうかと思いますが、年大会やその他のシンポジウムなど皆様が面と向かって交流できる場を提供することが学会の使命であると考えております。

本冊子が皆様のお手元に届くころ、COVID-19の状況はどうなっているのでしょうか？今年は6月に予定していた年大会（浜松）を取りやめ、11月に開催することにしました。願わくば世の中が平らぎ、環境バイオテクノロジーの議論を対面で熱く議論できるようになっていれば、と切に願います。

（環境バイオテクノロジー学会会長）